

研 究

保護者の病気理解と医療者の関わりについての検討

—学齢小児が受診したとき—

吉 川 一 枝

【論文要旨】

学齢小児が医療機関を受診したときの保護者の病気理解と医療者の関わりについて保護者を対象に質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。①受診時は多くの保護者が医師から病名や治療等の説明を受けていた。②医師の説明に約3割が理解できなかった。③医師の説明に満足している保護者は医師の説明を理解できたと認識し、帰宅後わからない内容が出てきた経験も少なかった。④医師の説明で理解できなかった内容は、多くが自ら医師に質問したり、診察後看護師に確認していたが、中には何もしないで帰宅する者もいた。⑤医師の説明を理解できないとき、看護師から働きかけを受けた場合は、理解できた割合が高かった。⑥帰宅後わからない内容が出てきた経験をもつ保護者は約4割であった。

Key words : 学齢小児の受診, 保護者, 病気理解, 説明, 医療者の関わり

I. はじめに

子どもが医療機関を受診した場合、どのような病気であっても保護者が子どもの病気に係る情報を正確に理解することは、家庭で子どもの世話をするうえで重要である。また、学齢期の子どもでは家庭を経由して子どもの情報を得る学校側にとっても病児の理解をすすめていく鍵となる。特に、日常生活において配慮を必要とするような慢性的な病気の場合には、家庭での配慮は勿論、学校においても配慮を行うことが、QOLの高い学校生活を送るうえで不可欠となる。

子どもの健康レベルがどのような状態であっても、学校が子どもにとって居心地のよい場所となることは、充実した学校生活を送るうえでとても重要な条件となる。このような子どもを支援していく学校側としては、どうしても支援

していくうえで必要な病気に関する情報を正確に理解する必要がある。そのためには保護者や子ども本人から、支援するうえで必要な情報を正確に学校に伝えていくことが重要となる。以前、筆者が行った慢性疾患の子どもへの養護教諭や担任教師の関わりに関する調査では、学校で慢性疾患の子どもに関わる際、保護者からの情報が不足していることに困難を感じているという結果であった。保護者が子どもの病気を正確に理解し、どのような情報を学校に伝える必要があるのかを判断するためには、医療者からの適切な助言が必要であり、子どもや保護者が医療機関を受診したときの医療者の関わりに大きく左右されるものと思われる。

そこで本研究は、慢性疾患に限定せずに、日常的に罹患する子どもの病気全般について、子どもが医療機関を受診したときの保護者の病気理解と保護者からみた医療者の関わりについて

Investigation of Guardians' Understanding of Disease and the Involvement of Medical Personnel (1842)
in Consultations for School-age Children

Kazue KIKAWA

岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 (教育/研究職)

別刷請求先: 吉川一枝 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 〒501-3892 岐阜県関市市平賀字長峰795-1

Tel : 0575-22-9416 Fax : 0575-23-0884

受付 06. 7. 18

採用 06.11. 2

明らかにすることを目的とした。

II. 対象と方法

通常の学級に在籍する小学生・中学生をもつ保護者を対象に質問紙による調査を行った。調査に関しては事前にK市教育委員会の了解を得た後、校長会で研究依頼を行った。そこで協力の得られた小学校・中学校各2校、合計4校の第一子の児童・生徒をもつ保護者1,117名に担任教師を通してアンケートを配布した。回収は郵送法とした。アンケートへの参加は自由であり、参加後もいつでも途中辞退できること、プライバシーは厳守されること、この研究以外にデータは使用しないこと、データは研究終了後シュレッダーで廃棄すること等、倫理的配慮については書面に明記した。アンケートの回収をもって調査に同意を得たものとした。調査項目は、①保護者の属性、②子どもの学年、③受診経験（過去9か月で最近受診した医療機関1か所）、④医療機関の種類、⑤診療科、⑥子どもの病名、⑦医師からの説明、⑧帰宅後わからないことが出てきた経験、⑨受診時に気をつけていること、である。調査期間は平成16年1月中旬から2月末までである。分析には統計ソフトSPSSVer10.1を使用し、カイ二乗検定を行った。

III. 結果

アンケートの回収数は306名（回収率27.4%）であった。そのうち、有効回答304名を分析対象とした。

1. 対象の属性

アンケートの回答者は母親282名（92.8%）、父親11名（3.6%）、祖父母7名（2.3%）、その他4名（1.3%）であった。年代は20歳代14名（4.6%）、30歳代108名（35.5%）、40歳代154名（50.7%）、50歳代以上13名（4.3%）、無回答15名（4.9%）であった。

2. 子どもの所属する学校

小学校197名（64.8%）、中学校107名（35.2%）であった。

3. 受診経験

調査日の属する学年に受診経験があったのは304名中250名（82.2%）であり、内訳は小学生167名（66.8%）、中学生83名（33.2%）であった。

4. 受診した医療機関の種類および診療科

受診した医療機関は、総合病院50名（20.0%）、個人医院171名（68.4%）、その他2名（0.8%）、無回答27名（10.8%）であった。診療科は、小児科113名（45.2%）、皮膚科30名（12.0%）、歯科26名（10.4%）、耳鼻科18名（7.2%）、整形外科13名（5.2%）、内科8名（3.2%）、外科4名（1.6%）その他9名（3.6%）、無記入29名（11.6%）であった。

5. 受診時の子どもの病名

かぜや腹痛104名（41.6%）、慢性的な病気48名（19.2%）、う歯27名（10.8%）、湿疹・いぼ19名（7.6%）、骨折・打撲18名（7.2%）、中耳炎・蓄膿症9名（3.6%）、肺炎・気管支炎6名（2.4%）、眼の病気4名（1.6%）、その他15名（6.0%）であった。

6. 医師からの説明

受診経験のある保護者250名中235名（94.0%）が医師から説明を受けており、説明を受けていなかったのは14名（5.6%）であった（無回答1名）。保護者が受けた医師からの説明内容（複数回答）は病名・診断名について170名（72.3%）、治療について147名（62.6%）、薬について140名（59.6%）、生活の仕方について100名（42.6%）、次回受診について71名（30.2%）、検査について41名（17.4%）、その他7名（3.0%）であった。医師の説明に対して理解できた保護者は受診経験のある235名中170名（72.3%）であり、理解できなかったのは62名（26.4%）であった（無回答3名）。医師の説明に対して理解できなかった62名の保護者の対応は、診察時に医師に聞き返した28名（45.2%）、診察後看護師に聞いた26名（41.9%）、知人等に聞いた12名（19.4%）、何もしなかった11名（17.7%）、自分で調べた8名（12.9%）、帰宅後電話で聞いた1名（1.6%）等であった。医師の説明が理解できなかった保護者のうち、

何も行動しなかった保護者11名の理由は、医師の態度が冷たかった4名(36.4%)、医師に聞きづらかった4名(36.4%)、順番を待っている患者がいたので遠慮した1名(9.0%)、大事なことではないと自ら判断した1名(9.0%)、知人に相談できると判断した1名(9.0%)であった。医師の説明に満足と感じたのは、説明を受けた保護者235名中218名(92.8%)、であり、不満足は14名(6.0%)であった(3名無回答)。病気に対する保護者の不安・心配については、受診した保護者250名中34名(13.6%)が抱いており、その内訳は、医師から説明があった保護者では235名中27名(11.5%) (無回答8名)、医師から説明がなかった保護者は14名中7名(50.0%) (無回答3名)であった。医師からの説明がなかった保護者は不安や心配を抱く割合が有意に高かった($p < 0.001$)。また、医師の説明に対して満足している保護者は医師の説明を理解できたと認識している割合が有意に高く($p < 0.05$)、帰宅後わからないことが出てきた経験も少なかった($p < 0.05$)。医師の説明に対して理解できなかった理由(複数回答)は、言葉だけの説明15名(24.2%)、声が小さい・専門用語が多い各11名(17.7%)、大雑把な説明9名(14.5%)、一方的な説明・早口各8名(12.9%)、聞く必要を感じない4名(6.5%)、周囲が騒がしい・自分が急いでいる各2名(3.2%)であった。保護者が理解できなかった説明内容は、病気の原因について27名(43.5%)、治療について24名(38.7%)、病名・診断名20名(32.2%)、薬について19名(30.6%)、生活の仕方について18名(29.0%)、検査について9名(14.5%)、受診について8名(12.9%)、その他4名(6.5%)であった。

7. 看護師の関わり

医師の説明を理解できなかった保護者62名中、看護師から何らかの働きかけを受けたのは、15名(24.2%)、働きかけを受けなかったのは47名(75.8%)であった。保護者が看護師から受けた働きかけの内容は、診療後に補足説明を受けた12名、医師に質問しやすいように配慮してもらった3名、病気の説明が書いてある印刷物をもらった2名、医師の説明が理解で

きたかどうか確認を受けた1名であった。看護師から働きかけを受けた保護者15名のうち14名(93.3%)が看護師の助けにより医師の説明を理解できていた。保護者が医師の説明を理解できない場合、看護師から働きかけがあった保護者は、働きかけのなかった保護者と比べ、医師の説明でわからなかった内容について、理解できた割合が有意に高かった($p < 0.001$)。

8. 子どものことでわからないことが出てきた経験

医療機関から帰宅後、子どものことでわからないことが出てきた経験をもつ保護者は95名(38.0%)、もたない保護者は133名(53.2%)、無回答22名(9.0%)であった。帰宅後わからないことが出てきたときの保護者の対処は、外来に電話で確認した36名(37.9%)、次の受診まで待った21名(22.1%)、何もしなかった11名(11.6%)、最初は心配だったが時間の経過とともに忘れた8名(8.4%)、どのようにしたら良いのかわからなかった6名(6.3%)、その他10名(10.5%) (無回答3名)であった。医師から保護者への説明の有無と帰宅後わからないことが出てきた経験の有無には、有意な差が認められなかった。

9. 受診時に気をつけていること

保護者が受診時に意識して気をつけていること(複数回答)は、質問や伝えたいことを頭で整理してくる135名(54.0%)、遠慮しないで聞くように気構えてくる122名(48.8%)、質問や伝えたいことをメモしてくる22名(8.8%)、特に気をつけていない21名(8.4%)であった。

IV. 考察

調査期間から遡って9か月の間に子どもが医療機関を受診した経験をもつ保護者はおよそ全体の8割であった。そのうち半数以上の保護者が医療機関を受診した時に、医師に意識的に子どもの病気についての質問や医師に伝えたい情報を整理してきたり、また、医師に遠慮しないで質問しようと覚悟を決めてきたりしており、保護者は概ね積極的に医師へ情報を伝達し、また医師から情報を得る努力をしているといえる。

1. 医療者からの説明と保護者の理解

受診経験をもつ保護者の9割が医師から子どもの病名・診断名、治療、薬、生活の仕方、受診や検査等について、さまざまな説明を受けていた。本調査では医師の説明を受けた保護者は受けなかった保護者より、子どもの病気に対して不安や心配になることが少なく、医師から説明を受けることが保護者の不安や心配の軽減につながっていることがわかった。しかし、医師の説明に対して理解できた保護者は、説明を受けた保護者の約7割であり、残りの3割は理解できていなかった。筒井は風邪を引いたり熱を出したりして外来受診をした母親を対象にした調査で、医療者から子どもの病気に関して説明を受けた母親が約3/4いるにもかかわらず、何も質問する必要がなかったと答えた母親はわずか1割強であった¹⁾ことを報告している。また、保育園に通園している子どもの保護者を対象にした調査²⁾では、医師の病状説明が理解できなかった経験のある保護者は60%に達していたと報告している。本調査では、医師からの説明で理解できなかった経験をもつ保護者はおよそ25%であり、田中らの報告よりもその割合は少ないものの、医師からの説明を理解できない保護者がかなりいることがわかる。この結果や先行研究¹⁾²⁾から言えることは、子どもが病気で医療機関を受診した保護者（多くが母親）は、医療者から病気に関する説明を受けても、説明をすべて理解していることは少なく、相当数理解できていない者がいることが推察される。本調査では、医師の説明を理解できない理由を2つに大別できた。1つは医師からの説明が「言葉だけ」であったり、「専門用語」が多かったり、「大雑把」であったり、「声が小さく」、「一方的」で「早口」であったりと、医師の側にその理由が内在しているのではないかと考えられるもの、もう1つは、医師からの説明を「保護者自身が聞く必要を感じなかったり、保護者が急いでいたり」と、保護者の側にその理由が存在している可能性のあるものであった。また、少数ではあったが、周囲が騒がしい等、周囲の環境が影響している可能性のあるものも見られた。田中らは、多くの小児科医が、保護者へ病状を説明する際に保護者が理解していないの

ではないかと感じた経験をもっている²⁾ことを報告しており、日々診療にあたる医師の立場から「医師は保護者が子どもの疾病や看護方法についてあまり理解していないことを知ったうえで病状説明を行う必要がある²⁾」と述べている。保護者に説明する際には、このような状況をよく理解したうえで、できるだけ専門用語は避け、誰にでも理解しやすい表現を用いるなど、より一層保護者にわかりやすく、かつ丁寧な説明がなされることが求められる。これは、医師のみならず、看護師含め医療者すべてに共通して求められる課題であると考ええる。しかし、保護者自身が医師からの説明を聞く必要を感じなかったり、自分が急いでいる場合では、たとえ医師が丁寧な説明を行ったとしても、また、看護師が補足説明をしたとしても、それはあまり効果がなく、子どもの病気を理解することに繋がっていかないことが推察される。これを促進していくためには、やはり保護者側の心構えも重要になるだろう。

2. 保護者の理解と看護師の役割

本調査では、医師からの説明を理解できなかった保護者のうち、看護師から「補足説明」や「医師に質問しやすいように配慮」してもらった等、何らかの働きかけを受けたのは、約1/4であったが、働きかけを受けた保護者のほとんどが、看護師の助けにより、医師からの説明を理解できていた。医師が子どもの病気について説明することは、ほとんどの場合行われていることであるが、今後は説明の質や母親が質問できるような環境づくりが重要な課題となり、外来における専門職としての看護婦（師）の役割が重要となる¹⁾。先述したように、医療者から病気に関する説明を受けても理解できにくい保護者がいること、また、医師からの説明時に看護師が同席することに保護者が肯定的である³⁾という研究結果からも、受診時には看護師がその場に居合わせることは非常に重要である。保護者と医師と看護師が場面を共有して、初めて医師と看護師が協働して保護者の理解を促進するような関わりができるものと考ええる。

3. 帰宅後わからない内容が出てきた経験と満足感

本調査では、全体の約4割の保護者が、医療機関から帰宅後に子どものことでわからない内容が出てきた経験をもっていた。その保護者の中で、帰宅後、医療機関へ電話で確認した保護者は約4割であった。しかし、全く何もしなかったり、最初は心配していても途中で忘れる場合があることもわかった。また、今回の受診日まで待つ保護者もいた。このように、わからないことを解決せずに全く何もしなかったり、途中で忘れてしまう場合には、子どもは適切な世話や看護を受けることが難しくなり、病気の回復を遅延させる等、子どもが不利益な状況に陥ることが予測される。さらにこれらのことが、子どもの日常生活そのものにも影響を及ぼすものと思われる。

医師から受けた説明に対して、保護者が満足感を得られた場合には、帰宅後も子どものことでわからない内容が出てきた経験は少なかった。説明を受けた保護者のうち、医師からの説明に対して満足と感じたのは、説明を受けた約9割の保護者であり、残りの1割はその内容が必ずしも満足のいく状況ではないと思っていた。岩越らの研究⁴⁾では、子どもが外来受診する保護者の不満の1つとして「不安が医療従事者にうまく伝わらないこと」をあげている。これらの理由を配慮して、保護者の不安を取り除くように、適切にかつ詳しく説明を行う¹⁾必要がある。短い診察時間内ではなかなか医師に言えないことも、診察後の処置等の待ち時間を利用⁴⁾し、そこに看護師が積極的に関わることで、医師からの説明に「満足感」を得られるものと推察される。今後、保護者が受診時「満足した」と感じられる状況とは具体的にどのようなことなのか、複数の個別事例を調査し検討していきたい。

本調査では医師からの説明の有無と帰宅後わからない経験の有無とには有意差は見られなかったが、このことは、たとえ医師から説明を受けたとしても、また、保護者が受診時に子どもの病気に関連した疑問点を質問できたとしても、帰宅後に新たな疑問が出てくる可能性があることがわかった。家庭に戻った患児や保護者ができる限り困ることなく日常生活を送れるよ

う、子どもの生活状況や特徴をよく理解したうえで説明や助言が不可欠であると考え。さらに、家庭に戻った患児や保護者が困ったことや疑問を速やかに解決できるよう、いつでも相談できる窓口を医療機関の種類や規模にとらわれることなく整備し、そのシステムを保護者が活用できるよう工夫していくことも重要である。

V. 本研究の限界および課題

本研究では、子どもの状況がどのような場合でも、子どもの世話をする親（保護者）にとってわが子の病気を正確に理解することは非常に重要である、という考えに立ち、学齢小児が医療機関を受診したときの保護者の病気理解と医療者の関わりの方針を捉えることに重点を置いた。このような理由から、ここでは、学齢小児の病気の種類やその程度、発達段階による違い等については明らかにできなかった。また、調査対象が保護者であるため、受診した医療機関の看護職の配置状況や看護体制などの確認ができなかったことも併せてこの研究の限界である。今後はこれらの点についても明らかにできるように継続して研究を行っていきたい。

VI. 結 論

- 1) 受診経験のある保護者の約9割が、病名・診断名、治療、薬、生活の仕方等について説明を受けていた。
- 2) 医師の説明に対して理解できた保護者は7割強、理解できなかった保護者は3割弱であった。理解できない理由は、医師側・保護者側にあるものに分類できた。
- 3) 医師の説明に対して満足している保護者は医師の説明を理解できたと認識している割合が有意に高く、帰宅後わからない内容が出てきた経験も少なかった。
- 4) 医師の説明が理解できなかった保護者の半数近くは医師に自分から聞き返し、4割は診察後看護師に聞くなどにより理解できていた。しかし、何もしないで帰宅する保護者もいた。
- 5) 保護者が医師の説明を理解できないとき、看護師から働きかけを受けた保護者は、働き

かけのなかった保護者と比べ、医師の説明でわからない内容について、理解できた割合が高かった。

- 6) 帰宅後、子どもの病気のことでわからないことが出てきた経験をもつ保護者は、約4割であった。

VII. おわりに

保護者が子どもの病気を正確に理解できるかどうかは、医療機関に受診した際の医療者の関わりと、保護者自身の子どもへ関心のもちようによるところが大きい。病気をもっている、その子が豊かな学校生活を送ることができるように、学校で子どもを支援していくうえで重要な要素となる情報を保護者や子ども本人が認識し、それを学校側（担任や養護教諭等）へ伝えることができるような医療者の関わりについて今後も追求していきたい。

ご多忙のところ、本研究にご協力いただきました、保護者の皆様はじめ教育委員会の諸先生、校長先生、担任の先生方に心より感謝申し上げます。

論文の要旨は、第51回日本小児保健学会（盛岡）において発表した。

引用文献

- 1) 筒井真優美. 外来受診した子どもの母親が医療者に情報を求める行動. 日本赤十字看護大学紀要1996; 10: 23-30.
- 2) 田中哲郎, 石井博子, 向井田紀子, 小林正子. 子どもの疾病に関する保護者の理解度. 小児科臨床2001; 54: 96-102.
- 3) 岩崎鎮枝, 秋山洋子. 小児領域における病状説明と看護師の役割. 第33回日本看護学会論文集(小児看護) 2002; 59-61.

- 4) 岩越浩子, 今井七重, 近藤紫津子, 林香奈子 他. 外来を受診する児の保護者の満足度に関するアンケート調査. 外来小児科 2004; 7 (2): 128-134.

[Summary]

A questionnaire survey was conducted in order to assess guardians' understanding of disease and the involvement of medical personnel in consultations for school-age children at medical institutions. The following results were obtained: 1) during consultations, many of the guardians indicated that they had received explanations from doctors regarding disease names, treatment, etc., 2) approximately 30% of guardians failed to understand the doctors' explanations, 3) guardians who were satisfied with the doctors' explanations perceived that they understood the doctors' explanations and infrequently felt uncertain regarding the contents of the explanations after returning home, 4) with regard to the contents of the doctors' explanations that could not be understood, many guardians directly questioned the doctors or confirmed the contents with nurses after the consultation, however, some returned home without taking any actions, 5) for cases in which the doctors' explanations could not be understood, a high rate of understanding was achieved when guardians were approached by nurses, 6) approximately half of the guardians felt uncertain of the contents of the doctors' explanations after returning home.

[Keywords]

consultations for school-age children, guardian, understanding of diseases, explanation, involvement of medical personnel